

青空が広がり、潮の香りに包まれながら、子供たちは元気いっぱいに過ごしています。

新緑広がる三宅島のシンボル雄山を校長室の窓から眺めながら、ふと自分の子供時代を思い出しました。

小学生の頃のことです。日曜日の早朝になると、地区の子供会の6年生たちがラッパを吹いて家々を回ってきました。記憶はおぼろげですが、まさしくこの季節の5月から10月の日曜日に行われていたように思います。

ラッパを吹いていたのは、心優しき腕っぷしの強い番長のような6年生。その音色は、剛腕とは対照的に、まるでトランペットの名手ルイ・アーム ストロングのような郷愁漂う音色が、静かな村に響いていました。

その音を合図に、山の中腹にある神社へ子供たちが竹ぼうきを手に集まり、境内の掃除をする。そんな伝統がありました。大人は誰もおらず、子供たちだけの活動です。掃除が終わると、それぞれの家へ帰るのですが、帰り道に地域の方々から「ごろうさん」と声を掛けられ、ジュースやお菓子をもらうこともありました。

今思えば、それは「外発的動機付け」だったのかもしれませんが、当時の私は仲間と共に「みんなのために働いている」という、何とも言えない心地よさを感じていました。眠い目をこすりながら神社を掃除し、帰るころには、どこか清々しい気持ちになっていたのを今でも覚えています。

この経験が直接つながるかは分かりませんが、私が教職を志すようになってから、「自己有用感」という言葉にこだわり続けている原点の一つかもしれません。集団の中で自分の役割や存在価値を実感できる場をつくることそれが教育者としての私の信念となっています。

本校では、「集団の中で自ら考えて行動する子供」を目指す児童像として掲げています。そのために、特別活動の充実を図っています。この時期、各学級では学級目標づくりが行われています。担任の思いを語り、保護者や地域の願いを受け止めながら、子供たちは話し合いを重ね、自分たちの学級をどのような場にしたいかを考えています。

あじさい学級では、「あかるく げんきな たのしい あじさいがっきゅう」という目標に決まりました。先生と子供たちがともに話し合い、心を込めて決めた目標を、模造紙に丁寧に書き記し、教室に大切に掲げています。慎重に筆を運ぶ子供たちの姿からは、その目標への思いの強さが静かに伝わってきます。

小さな手で描いた、大きな願い。

こうして子供たちが自ら目標を立て、仲間と協力して取り組んでいくこと。この一つ一つの積み重ねが、自己有用感を育み、確かな成長へとつながっていくのだと、改めて感じています。

海は今日も静かに風ぎ、山の木々は変わらぬ緑をたたえています。けれども、校舎の中には、確かな変化の風が吹いています。一つの目標に向かって心を寄せ合う子供たちの姿は、自然の悠久さとは対照的に、今この瞬間にしかない「成長のきらめき」を奏でています。その音色が、やがて子供たちの中に「自分はここにいていい」「自分は役に立っている」という実感となっていくことでしょう。

子供たちが目を輝かせ、仲間と手を取り合う姿を見ると心の中で流れる名曲。

“What a Wonderful World.”

